

県境の医者のお話～酒井明 説話集 3※～

山北と言えば宿毛市、正木と言えば愛南町一本松。中を流れる篠川の流りが区切りになっているだけで、もともとひとつと考えてもいい程の山峡の里。

しかし土佐分、伊予分というだけでどちらもずい分張り合ってたこともあるらしい。

その一つ、今の様な道路もまだまだの時代。正木の人々は、どうしてもお医者がおらんとまさかの時に困るので、岡本というお医者を迎えた。

正木にお医者が常駐するなら山北にもお医者がおるはずと、あれこれ相談して安東というお医者に来てもらった。

今ならちょっと無理だろうが、昔はやっぱりどこかがちがうといえそうなことである。双方共のその行動力。よしとなったら是が非でも。負けてたまるかという気持ち、それが二人のお医者になってきた。

当時のこと、そうそうどこにでも医者がいるということはない。

安東お医者は土佐分の楠山・橋上・京法など病人が出れば迎えられ還住敷を越えて山道をカゴにゆられて往診する。急な坂道、カゴで行くより歩いた方が楽だったのではなかろうかと、後々の人は思う道。

しかし、そこはお医者のお賃でやっぱりカゴにゆられて行ったという。

腕は安東お医者が上じゃったといわれるが、岡本のお医者もなかなかの人徳のある人で、どちらもずい分慕われたという。

いずれにしても山里に、呼んだらすぐに答える様な医者が2人いたとはなかなかのこと。里人達の気心は勿論だが、経済面でも相応のゆとりがないことにはできないことであつたらう。

山林の収入がしっかりあつた時代だったからとも言えそうだ。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。